

VI 昭和 51 年産米品質概況

8月4日以降の異常低温のため、出穂の遅れたものは開花受精状況が悪く、北海道統計情報事務所によれば(図VI-1)、粗玄米粒数歩合は66.8%、平年比89%で、最近の10ヵ年では46年に次いで低かった。

9月24日には網走で、25日には上川・空知北部・後志山麓で初霜がみられた。10月6日には道央以南でも初霜があったが、霜害防止のくん煙によって被害は最少限に喰いとめられた。刈取り最盛期は10月15日、平年より12日遅れ、刈取り期間は大中に延長された。

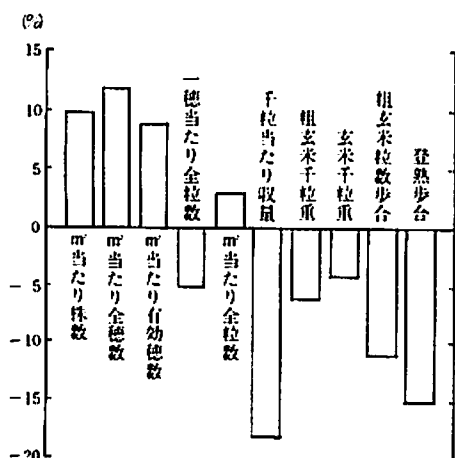
幼穂形成期の低温の影響でもみからの大きさは平年の93%程度で、さらに登熟不十分のため小粒で、粗玄米千粒重は平年対比94.1%、玄米千粒重は95.8%で、昭和46年について軽いものであった。また出穂期における葉鞘褐変病の多発と、登熟期の低温のため粒の充実がおくれ、一部には霜害もあって被害粒や青未熟粒が多く、屑米は平年より47%多かった。

このため2等検は僅か673俵、3等検23万1,758俵、これらをあわせた上位等級米は全体の2.1%にすぎなかった。これを過去の冷害年と比較すると、昭和39年5%、44年16%、46年11%より大中に下廻り近年にない最低の品質となった(図VI-2)。

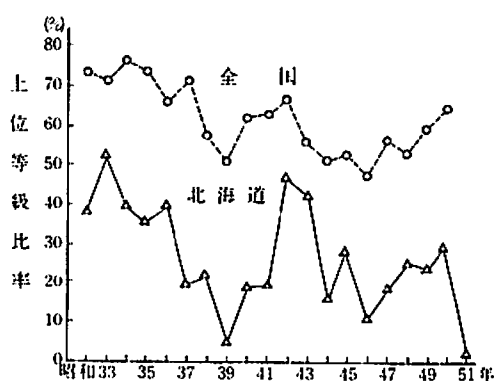
1. 地域別産米検査等級

北海道食糧事務所各支所別の等級別出荷割合を、過去の冷害年と対比させたのが表VI-1である。全道的に3等米は普通年の8%、4等米で39%、逆に5等米は4.4倍、規格外米は14.6倍である。

上位等級米の顕著に少ないのは札幌支所0.4%、岩見沢支所0.6%、富良野支所0.2%、名寄支所0.1%、北見・帯広支所は皆無である。逆に規格外米の多いのは札幌39.7%、苫小牧14.8%、岩見沢17.0%、名寄34.4%、富良野30.6%、北見・帯広は60%以上である。つまり石狩、空知南部、日高、胆振東部の出穂遅延の著しかった地帯と、上川北部および南部、網走、十勝の規格外米は全道出荷量の16%を占めている。



図VI-1 収量構成要素年偏差(統情)



図VI-2 産米上位等級の年次推移

表VI-1 等級別出荷内訳累年比較

支所名	年度 (昭)	検査数量 (比率%)	等級別比率 (%)						
			1等	2等	3等	4等	5等	等外	規格外
北海道	44	12,729,396 ^依		0.5	15.5	46.5	32.5	0.5	4.5
	46	7,816,020	0.0	0.5	10.9	38.0	39.4	0.1	11.2
	51	11,564,215		0.0	2.0	23.6	58.0	0.4	16.0
	普通年	11,472,408	0.0	0.3	24.8	60.4	13.3	0.0	1.1
札幌	44	10.9 [%]		0.1	9.9	49.5	35.3	0.3	4.5
	46	11.5		0.3	11.6	41.8	41.4	0.2	4.8
	51	9.4			0.4	8.1	50.0	1.8	39.7
	普通年	8.8		0.2	37.4	55.2	6.0	0.0	1.2
小樽	44	4.1		1.0	30.3	43.5	22.1	0.1	2.9
	46	4.5	0.0	3.4	42.4	39.2	14.0	0.1	0.8
	51	4.0			6.9	34.7	49.7	1.0	7.7
	普通年	4.3	0.0	1.1	39.4	47.0	11.6	0.3	0.6
函館	44	5.1		1.1	27.3	48.6	17.3	0.1	5.6
	46	7.4	0.0	2.6	36.5	43.4	15.5	0.1	1.9
	51	7.3		0.1	3.8	39.5	48.9		7.7
	普通年	6.3		0.4	33.0	57.1	8.6	0.0	0.9
苫小牧	44	6.8	0.1	4.1	40.8	40.7	8.5	0.2	5.7
	46	7.2	0.0	1.3	22.6	51.7	22.4	0.1	1.9
	51	5.9			3.3	28.0	53.9		14.8
	普通年	7.2	0.0	1.1	35.8	51.5	11.0	0.0	0.6
岩見沢	44	22.8	0.0	0.2	18.3	63.2	14.8	0.1	3.4
	46	26.5		0.0	4.8	46.2	44.7	0.0	4.2
	51	22.9			0.6	15.8	65.8	0.8	17.0
	普通年	23.8		0.0	15.7	69.9	12.4	0.0	1.9
滝川・深川	44	17.8	0.0	0.2	10.1	45.1	40.8	0.5	3.3
	46	19.3		0.0	7.3	45.3	42.3	0.0	5.1
	51	21.6			2.0	24.3	66.6		7.0
	普通年	21.6	0.0	0.5	26.9	61.4	10.7	0.0	0.6
留萌	44	1.8	0.0	0.2	6.7	31.6	53.5	2.1	5.4
	46	2.6		0.0	10.6	36.2	38.8	0.1	14.4
	51	3.5			3.6	24.0	62.7	0.5	9.2
	普通年	3.4		0.3	25.9	58.1	14.9	0.1	0.7
旭川・富良野	44	18.5		0.4	13.4	42.3	37.1	2.2	6.5
	46	16.5		0.0	2.2	13.6	48.3	0.0	36.0
	51	18.6		0.0	2.8	37.2	49.7	0.0	10.2
	普通年	15.3	0.0	0.3	23.2	59.4	16.0	0.1	1.1
名寄	44	7.2		0.0	1.8	21.7	71.9	1.5	3.2
	46	3.8			0.6	9.2	58.3		31.9
	51	4.8			0.1	3.9	61.6	0.0	34.4
	普通年	5.6		0.1	13.2	67.5	18.2	0.0	1.0
北見	44	3.0			0.6	14.8	77.3	2.9	1.4
	46	0.0							100.0
	51	1.2				2.0	37.1		60.9
	普通年	2.6		0.0	8.0	40.3	49.0		2.7
帯広	44	2.0		0.2	3.4	69.5	25.8	0.1	1.0
	46	0.9				0.2	13.2	0.2	86.4
	51	0.9				0.0	36.1		63.9
	普通年	1.0			0.6	38.3	60.4		0.3

注) 北海道食糧事務所の資料による。規格外数量は未熟粒混入甲乙規格外規格、青未熟粒混入規格外規格の数量を含んで計算。

普通年は昭和45、47、48、49、50年の5ヵ年平均を以て示す。

表VI-2 稲葉鞘褐変病と品質

処 理	病 穂 率 %	着 色 粒 %	等 級
防 除 区	0.9	6.6	4 下
無防除区	39.4	28.3	規 格 外

注) 昭和51年稲作部、アグリマイシン 100、水和剤 500
倍、6回散布

品質低下の直接原因は8月以降の低温に基づくが、これとともに葉鞘褐変病の多発と稚苗機械移植機の増加が大きく関与したものと思われる。

表VI-2は中央農試稲作部が栗沢町で行なった葉鞘褐変病の防除試験の1部である。病穂率が約40%を示す多発現場では着色粒の発生が著しく多く、防除区の4.3倍である。

このため品質は大きく低下し、防除区の4等米に対し無防除区では規格外となっている。

表VI-3は箱マットの稚苗と紙筒苗の中苗を、5月17日から6月1日まで移植時期を4回変えて行なった試験での青米歩合を示したものである。どの移植時期でも明らかに、中苗より稚

表VI-3 稚苗と中苗の青米歩合(%)

育 苗 型 式	移 植 期 (月 ・ 日)				
	5.17	5.22	5.27	6.1	平 均
箱マット(稚苗)	21.5	33.2	37.4	38.9	32.8
紙 筒(中苗)	20.2	25.7	26.4	22.5	23.7
箱 / 紙 %	106	129	142	173	138

注) 昭和51年稲作部

苗で青米が増加しており、移植時期が遅れるほど増加が顕著である。昭和51年は稚苗機械移植が多く、しかも移植時期が遅かった。青米歩合は中苗に比べてお

そらく40~50%多くなっても当然と推定される。

2. 品種別検査等級

表VI-4に示すように、昭和51年度の作付上位13品種について上位等級米出荷割合をみると、全道平均2%を下廻ったのは「イシカリ」、「ゆうなみ」、「きたこがね」、「そらち」であり、全道平均をかなり上廻ったのは「キタヒカリ」5.8%、「さちほ」4.3%、「ほうりゅう」3.1%、「巴まさり」5.2%である。最近4カ年の平均で最も上位等級米の多いのは「ユーカラ」の55.5%、ついで「マツマエ」41.7%、「ほうりゅう」33.1%、「巴まさり」30.5%と順次する。50年度について比較すると、「キタヒカリ」63.7%、「さちほ」39.2%は「ユーカラ」と「マツマエ」の中間に位置する。したがって、例年上位等級米を多く出している品種は、昭和51年度においても比較的多く上位等級米を出したことになる。

(1) 成苗における品質

中央農試稲作部の成績から、過去の冷害年における品質を普通年と比較したのが表VI-5である。ここで昭和44、46、51冷害年に共通な5品種(しおかり、イシカリ、ゆうなみ、ほうりゅう、ユーカラ)の平均値で各形質の年次間差を示すと次のようである。

屑米歩合(%) : 昭和51年(4.9) > 昭和46年(4.1) > 44年(2.4)

千粒重(g) : 昭和51年(20.9) > 昭和44年(20.7) = 46年(20.6)

ℓ重(g) : 昭和46年(823) > 昭和51年(814) > 昭和44年(809)

完全米歩合(%) : 昭和51年(57.7) > 昭和46年(53.5) > 昭和44年(33.0)

青米歩合(%) : 昭和44年(34.4) > 昭和51年(23.1) > 昭和46年(19.2)

銹米歩合(%) : 昭和44年(15.4) > 昭和51年(12.9) > 昭和46年(9.1)

腹白歩合(%) : 昭和44年(29.2) > 46年(18.2) > 51年(9.2)

表Ⅵ-4 品種別上位等級米の累年比較

品 種 名	昭和51年検査 数量 %	上 位 等 級 米 比 率 %							昭和51/平均 %
		昭 51	昭 46	昭 47	昭 48	昭 49	昭 50	昭47~50 平 均	
イシカリ	36.5	1.4	2.2	11.2	26.5	29.6	25.7	23.3	6.0
ゆうなみ	17.1	0.8	3.0	8.5	15.9	11.4	22.2	14.5	5.5
キタヒカリ	12.1	5.8					63.7	(63.7)	(9.1)
しおかり	6.2	2.5	19.3	20.2	21.9	22.9	30.4	23.9	10.5
マツマエ	5.1	2.1	69.9	48.9	45.5	36.3	36.0	41.7	5.0
さちほ	3.3	4.3				48.6	39.2	(43.9)	(9.8)
ユーカラ	2.9	2.4	22.1	34.2	67.9	50.1	69.7	55.5	4.3
ほうりゅう	2.2	3.1	10.9	31.6	33.8	31.2	35.9	33.1	9.4
うりゅう	1.0	2.9	16.1	16.8	24.1	19.0	35.0	23.7	12.2
かちほなみ	0.6	—	0.1	0.5	0.4	0.1	0.1	0.3	
きたこがね	0.5	0.1			0.2	0.9	10.4	3.8	2.6
巴まさり	0.5	5.2	53.1	26.8	9.9	34.1	51.3	30.5	17.0
ひめほなみ	0.4	2.0	1.0	19.7	18.1	23.4	18.9	20.0	10.0
そらち	0.3	0.2	3.3	3.2	3.0	8.6	5.2	5.0	4.0
う る ち 計	ト ン 687,175 (100.0)	2.0	11.5	17.7	25.4	24.9	29.5	24.3	8.2

冷害年におけるこれら7形質はすべて、当然ながら普通年よりも品質的に劣る。44、46年に比べると、昭和51年冷害の特徴は屑米・青米・銹米の多いことである。しかし検査等級には各年とも大差なく4等で、昭和46年が中上、51年中下、44年下と区別される程度の差しかない。

品種別にみると昭和51年の「ユーカラ」のみが、明らかに1等検劣った。原因は晩生のための青米増加による。しかし、「イシカリ」、「ゆうなみ」、「ほうりゅう」はいずれも、昭和44、46年に比べ完全歩合は高く、青米は少なく、検査等級も僅かながら良い。

次に奨励品種決定現地調査における検査等級を、過去の冷害年ならびに普通年と比較したのが表Ⅵ-6である。各年共通な25所中3等検は上川中央部の2カ所のみで、4等6カ所、5等9カ所、等外および規格外は8カ所である。

網走・十勝は昭和46年に比べるとまだ良いが44年よりは劣る。留萌は昭和44、46年よりも良好である。しかし上川・空知・後志・日高・渡島・檜山の各地はいずれも昭和44、46年を下廻る等級を示した。全25カ所の平均は昭和51年5等中、46年4等下、44年4等中であるから、最近の冷害年では最も不良である。これは、本年が一部地帯を除き典型的な遅延型冷害年で、稔実歩合が比較的高い上に登熟気温が極めて低温であったこと及び全道的に葉鞘褐変病が多発して着色米が多かったことが大きく原因していると考えられる。

(2) 稚苗、中苗機械移植栽培の品質

昭和46年の冷害年では障害型を回避したため、成苗と稚苗の品質差はほとんど見られなかった。昭和51年の場合は成苗と中苗の差は比較的小さかったが、成・中苗と稚苗の間には屑米の増加、完全米の著しい減少および青米の増加による品質の差は顕著である(表Ⅵ-7)。遅延型冷害による登熟性不良が収量よりも品質低下に大きく影響したと見るべきである。

表VI-5 冷害年における米質低下の比較

品種名	豊凶別	出穂期 月・日	玄米重 kg/10a	歩合 %	千粒重 g	ℓ 重 g	完全米 歩合 %	青米 歩合 %	銹米 歩合 %	腹白 歩合 %	死米 歩合 %	検査 等級
し お か り	冷害年 (昭44)	8. 11	416	2.2	19.3	802	23.4	26.2		55.6	6.8	4 中下
	" (昭46)	6	362	1.4	17.9	823	73.8	9.8	8.3	7.0		3 中上
	" (昭51)	8	498	4.0	18.8	816	63.0	14.9	6.6	12.0		4 上
	普通年	4	508	3.8	19.6	825	67.4	13.8	6.6	12.6	4.6	4 上下
イ シ カ リ	昭44年/普通年%	日 7	82	58	98	97	35	190		441	148	107
	昭46年/普通年%	2	71	37	91	100	109	71	126	56		81
	昭51年/普通年%	4	98	105	96	99	93	108	100	95		98
	普通年	4	539	1.8	22.0	826	72.7	11.5	15.2	4.3	2.1	4 中上
ゆ う な み	冷害年 (昭44)	12	469	1.5	21.6	813	22.5	33.5		40.6	11.3	4 中
	" (昭46)	7	358	12.6	22.4	821	49.6	20.4	11.0	42.1		4 上
	" (昭51)	9	504	3.8	22.6	824	65.6	22.4	12.5	15.0		4 中
	普通年	4	549	3.4	22.5	825	71.1	11.7	13.0	11.3	3.3	4 中上
は う り ゆ う	昭44年/普通年%	日 8	102	44	96	99	32	286		359	342	102
	昭46年/普通年%	3	65	37	100	100	70	174	85	373		95
	昭51年/普通年%	5	92	112	100	100	92	191	96	133		102
	普通年	5	543	3.3	21.4	831	67.6	11.7	14.0	8.0	4.8	4 上
キ タ ヒ カ リ	冷害年 (昭44)	14	426	2.3	20.1	812	28.0	40.5		32.0	14.0	5 下
	" (昭46)	8	372	1.6	20.0	833	45.6	18.8	16.2	16.9		4 中
	" (昭51)	13	465	4.1	20.3	815	55.2	19.9	7.2	16.0		4 中
	普通年	5	543	3.3	21.4	831	67.6	11.7	14.0	8.0	4.8	4 上
さ ち は	昭44年/普通年%	日 9	78	70	94	98	41	346		400	292	138
	昭46年/普通年%	3	69	48	93	100	67	161	116	211		107
	昭51年/普通年%	8	86	124	95	98	82	170	51	200		107
	普通年	5	543	3.3	21.4	831	67.6	11.7	14.0	8.0	4.8	4 上
ユ ー ラ カ	冷害年 (昭51)	8. 16	432	3.9	20.9	812	61.6	18.6	7.2	1.0		3 下
	普通年	6	528	3.4	21.4	828	78.3	8.1	7.7	3.3	3.1	3 下
	昭51年/普通年%	日 10	82	115	98	98	79	230	94	30		97
	普通年	9	528	2.3	23.3	823	78.8	6.6	7.1	3.1	2.5	3 中
ユ ー ラ カ	昭46年/普通年%	日 2	71	52	94	101	93	195	227	313		117
	昭51年/普通年%	9	75	100	97	98	83	274	79	32		106
	普通年	11	543	3.6	21.8	825	72.8	16.1	15.5	1.4	4.4	4 上
	普通年	11	543	3.6	21.8	825	72.8	16.1	15.5	1.4	4.4	4 上
ユ ー ラ カ	冷害年 (昭44)	20	383	4.8	20.5	808	50.5	34.0		3.5	13.0	4 中下
	" (昭46)	13	385	4.2	21.1	829	35.7	31.8	25.7	14.6		4 下
	" (昭51)	20	427	8.9	21.1	800	41.2	39.2	6.6	1.0		5 上
	普通年	11	543	3.6	21.8	825	72.8	16.1	15.5	1.4	4.4	4 上
ユ ー ラ カ	昭44年/普通年%	日 9	71	133	94	98	69	211		250	295	107
	昭46年/普通年%	2	71	117	97	100	49	198	166	1043		118
	昭51年/普通年%	9	79	247	97	97	57	243	43	71		127
	普通年	11	543	3.6	21.8	825	72.8	16.1	15.5	1.4	4.4	4 上

注) 稲作部沖積土成苗手植標肥における成績、たゞし昭和47年の「キタヒカリ」は泥炭土。
普通年は昭和45, 47, 48, 49, 50年の5ヵ年平均、たゞし「キタヒカリ」と「さちば」は昭和47～50年の4ヵ年平均。

表VI-6 奨決現地調査の検査等級累年比較(成苗)

支庁	町村名	品種名	昭和51年	普通年	昭和46年	昭和44年	支庁	町村名	品種名	昭和51年	普通年	昭和46年	昭和44年
網走	端野	きたこがね	5下	4中	外	5中	空知	中富良野	イシカリ	5上	3下	4中	3下
	女満別	"	5下	5上	外	4中		士別	しおかり	外	4上	4下	4下
	遠軽	"	外	4下	外	4中		風連	"	青混	4上	3下	5中
	留辺蘂	"	外	4下	外	4中		平均		5上	4上	4下	4下
	平均		5下	4下	外	4中		深川	ユーカラ	5下	3下	4中	5中
十勝	池田	かはなみ	未乙	5上	外	5上	知床	新十津川	イシカリ	5中	3下	4下	4上
	音更	"	未甲	5中	外	5中		長沼	"	5中	5上	4上	3中
	平均		未甲	5上	外	5中		平均		5中	4上	4中	4中
留萌	遠別	しおかり	5	4上	4中	外	後志	共和	イシカリ	4上	3下	3中	3中
	羽幌	イシカリ	4中	4下	5中	5下		俱知安	"	外	3下	4中	2中
	小平	"	4下	4上	3中	5中		日高	厚真	イシカリ	5中	4上	3下
上川	平均		4下	4上	4中	5下	渡島・松山	八雲	ゆうなみ	4下	4上	3下	4中
	当麻	イシカリ	4中	4中	4下	—		今金	"	5中	3下	4下	4上
	東鷹栖	"	3下	3中	3下	—		江差	巴まさり	5上	3下	4上	—
	東旭川	"	3下	3下	4中	3中		全平均		5中	4上	4下	4中
	上川	"	未乙	4中	外	4中							
川	美瑛	"	4下	4上	外	4上							

注) 普通年：昭和45、47、48、49、50年の平均

未甲：未熟粒混入甲規格外玄米

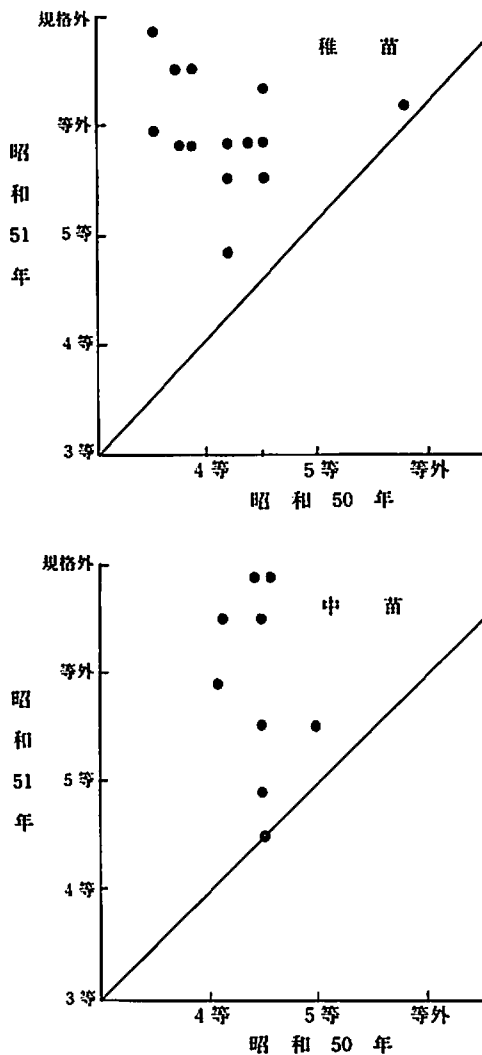
未乙： " 乙 "

青混：青未熟粒混入 "

表VI-7 冷害年の移植型式と品質

年度	品種名	土壌	苗型式	移植期 月・日	出穂期 月・日	玄米重 kg/10a	解米歩合 %	千粒重 g	ℓ重 g	完全米歩合 %	青米歩合 %	銹米歩合 %	腹白歩合 %	検査等級
昭和46年	イシカリ	沖沖	成	5.22	8.6	332	0.7	21.5	810	62.7	15.2	15.8	10.4	4中下
			稚	20	10	387	2.1	21.5	810	62.7	15.2	15.8	10.8	4中上
			稚	30	12	413	3.5	22.0	812	59.7	16.8	16.5	14.0	4中
昭和51年	イシカリ	沖泥	成	5.21	8.8	479	3.5	21.7	816	63.7	19.3	12.4	2.0	4中
			中	24	10	501	2.9	22.5	818	62.4	23.5	9.9	6.0	4下
			稚	22	15	481	5.4	22.1	—	39.7	33.2	13.4	—	—
昭和51年	さちほ	沖泥	成	5.21	8.18	396	0.9	22.6	806	65.1	18.1	5.6	1.0	3下
			中	24	18	450	2.4	23.3	811	64.9	14.5	8.6	0.0	4上
			稚	22	19	430	3.6	23.0	—	43.0	27.4	8.1	—	—

注) 中央農試稲作部奨決および作季試験成績による。



図VI-3 奨決現地調査における稚苗・中苗機械移植栽培の検査等級

奨決現地調査から稚苗、中苗それぞれについて昭和50年の検査等級と対比させたのが図VI-3であるが、中苗よりも稚苗の落差が大きい。したがって、稚苗機械移植栽培面積の増加分が直接上位等級米の生産をはばんだと解釈されるが、実際には規格外米の出荷を極力抑えるために、混米用に使われた上位等級米がかなり多かったにちがいない、上位等級米出荷量2%をそのまま上位等級米の生産量と受けとめることはできない。

3. 食味特性上の特徴

一般に冷害年の産米は、検査等級の低下とともに食味もよくないのが通例である。表VI-8には中核地帯における4場所のアミログラム特性を示した。昭和51年産米でも場所および品種間の差がかなり明瞭である。

アミログラムの最高粘度(MV)は、原原種農場が最も高く、4品種平均で328B.U.である。これに対し上川農試が最も低く、平均227B.U.で、この差は100B.U.ときわめて大きい。ブレークダウン(BD)も同様であるが、その差は16B.U.でそれほど大きくはない。表VI-8に示すように各品種ごとに求めた出穂後40日間の積算気温は、原原種農場が最も高く(737℃)、上川農試が最低である(716℃)。アミログラム特性は登熟期間の前半の気温に強く影響されるので、旭川市の8月の平均気温18.0℃と滝川市の18.9℃の約1℃

表VI-8 昭和51年産米のアミログラム特性と出穂後40日間の積算気温(℃)

品 種 名	上 川 農 試			深川市立試験地			原 原 種 農 場			稲 作 部		
	積算 気温 ℃	MV B.U.	BD B.U.	積算 気温	MV B.U.	BD B.U.	積算 気温	MV B.U.	BD B.U.	積算 気温	MV B.U.	BD B.U.
空育 103号	717	240	61	752	272	55	747	339	69	726	253	62
イシカリ	719	206	49	749	260	48	747	320	59	724	235	61
ゆうなみ	719	200	38	749	253	45	744	289	61	722	224	41
キタヒカリ	708	260	65	715	330	65	711	365	95	705	299	70
平 均	716	227	53	741	279	53	737	328	69	719	253	59

注) 各場成苗標肥栽培

表Ⅵ-9 アミログラム特性と白米蛋白の累年比較

品 種 名	昭 和 51 年			昭 和 50 年			昭 和 49 年		
	M V B.U.	B D B.U.	蛋 白 %	M V B.U.	B D B.U.	蛋 白 %	M V B.U.	B D B.U.	蛋 白 %
農 林 20 号	310	72	10.5	454	154	9.2	472	200	9.7
ささほなみ	270	40	9.9	450	130	8.9	453	193	7.9
イ シ カ リ	248	48	9.6	490	124	8.2	428	136	7.8
ほうりゅう	310	58	9.5	493	149	8.1	420	120	7.7
巴 ま さ り	250	47	9.5	424	149	8.0	398	149	6.7
平 均	278	53	9.8	462	141	8.5	434	160	8.0

注) 稲作部成苗標肥栽培

の差が大きかったものと考えられる。しかし深川と滝川の最高粘度の差は気温のみでは説明し切れない。また稲作部と上川農試の差も同様であるが、登熟日数の長いことによるかもしれない。すなわち上川は平均 50 日に対し、深川、稲作部は 60 日を要しているからである。いずれにせよ、登熟期間は上川より空知が恵まれたにちがいがなかった。

「空育 103 号」、「イシカリ」、「ゆうなみ」の MV はいずれも大差ないが、「キタヒカリ」は 4 場所とも常に最高で、平均 314B.U. を示した。また B D も平均 74 と、昭和 51 年では「農林 20 号」に次いで高かった。

表Ⅵ-9 は、普通年との比較を示した。昭和 49 年は 50 年より豊作であったが、登熟期間の気温は 50 年がまさり、アミログラム特性も 50 年の方がまさっている。これに対し昭和 51 年産米は MV で約 200B.U.、B D で約 100B.U. の低下であり、逆に白米蛋白は 1.3% 高くなっている。品種別には「イシカリ」の低下が、他の品種よりも大きい。

これらはいずれも成苗の成績であるから、稚苗の場合にはさらに低下することが考えられ、昭和 51 年産米の食味は大巾に劣ったものと推定される。